

## 第2章

### エジプトの生殖補助医療における男性の関わりと家族・親族関係の変遷について

岡戸 真幸

#### 要約:

本稿は、エジプトの生殖補助医療現場での男性の関わりに焦点を当てる。まず、生殖補助医療が家族の再生産と関わりがあるため、同国で家族・親族がどのような位置づけにあるかを、人類学における親族論を整理し、生殖補助医療との関係に言及する中で、明らかにする。そして、1952年革命以降から現在までの家族・親族関係の変遷を概観する中で、男性が置かれている状況を明らかにし、生殖補助医療が男性性のあり方への新たな展望になる可能性を示唆する。

**キーワード:** エジプト、生殖補助医療、男性性、家族・親族

#### はじめに—生殖補助医療現場での男性の関わり

本稿では、エジプトにおける生殖補助医療について知るために、同国における家族・親族について考えていきたい。それは、生殖補助医療が家族の再生産と関わりがあるからである。両者の関わりを考察するには、エジプトの文化や社会的背景の理解が必要であり、そこから、エジプトひいては中東に固有の事情が解るだろう。特に、家族・親族における男性成員の性別役割に注目し、生殖補助医療における男性の位置づけを整理していく。

エジプトにおける家族・親族のあり方は、近代以降における社会、経済状況の変化から、拡大家族から核家族化への傾向を見てとれる。その流れの中で、生殖補助医療も登場しており、この技術の導入と家族の形成、再生産の関係は、注目できる。また、人類学において、生殖補助医療は家族・親族関係のあり方を捉え直す上で重要な役割を果たしており、本稿は、人類学における先行研究を概観する中で、その意義を見ていき、エ

ジプトの文脈との異同を明らかにする。

生殖補助医療では女性だけでなく、男性の理解と協力も重要になるが、エジプトにおける生殖補助医療を扱った先行研究には、その現場で、女性に比べ、男性が消極的にしか関わりを持とうとしない事例が紹介されてきた (Inhorn [1994: 329]; [2005: 294])。男性の関わりについて、仕事を持っている男性にとって、日中の診察時間に病院に行くのが難しいというような問題もあるが、不妊の原因が自身にあると考えたがらない男性が多いのも事実のようである。

その理由について、男性が自身の性的能力を疑われることを、自身の男性性のあり方と結びつけて考える傾向にあることが指摘されている (Inhorn [2005: 289])。健康な男性は、生涯にわたり、性的な活力に満ちた存在であるとされ (Hoodfar [1999: 254])、不能は恥ずべきことであり、病院に行く必要はないとされる。そして、男性にとって、検査であっても、精子を病院で採取されることは、屈辱的な経験であると考えられる (Ali [2002: 128-129])。それは、男性は、家族の中で、稼ぎ手として物質的な提供者であるだけでなく、性的な意味でも精子の提供者であることが求められているからである (El Feki [2013: 74])。また、男性は、精子の採取を行うために、病院で自慰をさせられることに、宗教上で禁止された行為であると考える者もあり (El Feki [2013: 82])、彼らの関わりを困難なものにしている。

それに対し、治療にあたり、女性の積極的な関わりが描かれてきたが、それは、不妊の理由を女性に求める傾向が強く、女性自身も妊娠することが当たり前だとみなされる風潮による (El Feki [2013: 81])。それだけでなく、不妊の原因は女性側に求められ、全ての検査が済んで問題がないとされるまで、男性は疑われないのである (Hoodfar [1999: 243])。

エジプトは、子を持つことに高い価値を置く社会であり、結婚後に即妊娠し、第一子の出産することへの周囲からの関心と圧力は高い。人類学者のファルハ・ガンナムは、彼女が結婚後に入ったフィールドで、子どもを持つことに関する周囲の関心の高さとして8年後に娘を授かった時の周囲の喜びについて触れている (Ghannam [2013: 180, 182])。彼女は、エジプトにおいて、不妊とは、結婚と家族・親族関係に緊張を強い、全ての労力をかけて取り組まねばならない主要な社会的問題であると述べている (Ghannam [2013: 40])。つまり、エジプトにおいて、子を持つかどうかは夫婦二人だけで決められる問題ではないのである。

また、結婚は、子の誕生によって確かなものになり、さらに、特に息子の誕生でより確かなものになる。2人以上の子ども、さらに息子がいることで、夫は、家庭に結び付けられ、自分に課された経済的義務を果たすようになると言われる。息子への偏重は、エジプトが父系出自社会であることと、息子からの経済的な援助を将来に期待できることが母親によっても挙げられる。しかし、生活の援助や家事手伝い、弟や妹の世話をし

てくれるのは娘であり、母親にとっては、娘を望む者も多い (Hoodfar [1999: 247-248])。さらに、最近のカイロでは、介護や精神的な支えの面で娘を熱望し、息子だけの母親を寂しいと思う女性もいるようである (Ghannam [2013: 181])。

このように家族の再生産の現場において男女の関わりには違いがあるが、なぜそのような違いがあるかについては、エジプトにおける家族の中での男女の性別役割を理解しなくてはならない。また、生殖補助医療は、子どもの誕生に関して、女性に焦点を当てるだけでなく、男性の協力や理解が等しく重要になる。そのため、男性がエジプトにおける家族の中でどのような立場にあるか、その男性性を捉えることが、生殖補助医療における男性の関わりのある方の理解につながるだろう。家族は、社会の基盤であり、男性性のあり方も家族に規定されている。それは、エジプトの男性性の背後にある父権的な家族構造とも関係してくる。

エジプトにおける夫婦のあり方は、夫が扶養義務を持ち、家族成員を経済的に支え、妻が家事と子の世話に従事するという家庭内での性別分業によって成り立っている (Rugh [1984: 71])。男性性とは、こうした夫婦間のあり方によって作られ、男性成員と女性成員が保護と非保護の関係によって成り立つこととも関係する。エジプトでは両性のどちらにも通用する名前は無い。男性は、生まれた後に男性として名付けられ、父系出自社会の中で、父系の系譜に連なることでその位置づけが決定づけられるのである (Ghannam [2013: 34])。

また、生殖補助医療という医療行為に頼る前に、タイミング療法など夫婦間の営みについて、エジプトでは産婦人科医の多くが男性であるため (Inhorn [2005: 297])、女性が、男性の医師に相談でき、語り、指導を受けられるか、は大きな問題である。80年代以降のイスラーム復興の中で、特に保守的な層には、自身の妻が異性の医者で診察を受けるのを好まない男性もいる。そして、医者もそうした状況の中で、患者との問題を避けるために、具体的な治療を行えず、不妊治療が進まないという状況が報告されている (Inhorn [2005: 298])。女性は、夫が非協力的な中で、男性医師によって、治療方針が決定されるため、生殖補助医療の現場で、夫と医師の双方の間で、板挟みになるのである。ここでも、夫と医師の男性と女性の間で対等な関係は存在しない。

そして、治療に必要な情報として、夫婦間の営みなど性が語られる必要があるが、現代のエジプトにおいて、性は、公に議論されるものではなく、行うものと考えられている (El Feki [2013: 5])。ただし、近隣の女性同士では、性は語られており、問題や悩みなどに対して、経験の豊富な年上の女性から助言が与えられる環境はある (Hoodfar [1999: 251])。また、イスラームにおいて、預言者の言行録であるハディースには、性行為に関する記述がいくつかあり (アル・ハッジヤージ [1988])、性が元々語られなかったわけでも、忌避されてきたわけでもない。生殖補助医療の現場で、性が語られるかどうかは、男性が子の誕生のために協力的になるかどうかとも関係する。その背景を理

解するために、以下ではエジプトにおいて家族とはどのような集団と考えられてきたか、そしてその中でどのような状況に現在あるのかを見ていきたい。

## I 人類学における親族論と生殖補助医療研究への脚光

人類学の分野で衰退傾向にあった親族論が、近年大きな脚光を浴びた理由の一つは、生殖補助医療の発達がある。それは、生殖補助医療が従来考えられてきた家族関係に、新たな人間関係の可能性を提示したからである。エジプトにおける家族・親族関係も人類学者に注目され研究されてきたが、この流れはまだ訪れず、近代における家族構造の変化を生殖補助医療と結びつけた研究は少ない。まず、エジプトにおける家族・親族関係のあり方を考える上で、人類学において家族・親族がいかに描かれ、生殖補助医療とどのような関係を持つのかについて整理したい。

人類学において、親族論が求めたのは、人間の社会的関係の理解を家族・親族関係を通して深めるためであった。その原理を血縁に求め、父系、母系、双系などに系譜を分類した上で、ある集団間で主に花嫁をやりとりする婚姻構造の把握が初期の人類学者の課題となったのである<sup>1</sup>。それにより、その社会の人間関係や慣習などの機能や構造を理解しようとした。中東を対象にした人類学の研究においても、家族構造の調査は、当該社会を把握する上で重要視された。特に、他の地域においては、親族外婚と交差イトコ婚が多く存在するのに対し、中東では親族内婚で父方平行イトコ婚の慣行が存在したため、その婚姻制度に関する関心は高かった。マーフィとカスダン<sup>1</sup>は、こうした婚姻形態には、財産相続を親族内で限定し、財の分散を防ぐ目的があると言われることに対し、それよりも父系出自集団の分裂を防ぎ、系譜に基づく関係性を構築する役割があると述べている（マーフィ、カスダン [1982: 217]）。

父方平行イトコ婚については、現代エジプトでも見られ、筆者の調査対象である都市で生活する地方出身者の間でも行われている。その理由について彼らから聞くと、結婚相手を子どもの頃から知っており、その性格も把握しているだけでなく、その親についても良く知っている身内としての安心感を挙げる者が多い。この身内との結婚とは、人類学で取られてきた外婚による親族と姻族の区分が存在せず、両者が同一になる可能性を提示している（大塚 [1994: 50]）。つまり、父方平行イトコと結婚することで、父方と母方の区別も重視されなくなるのである。

中東は一般的に父系出自社会と言われ、親族内婚によって、家族・親族成員は、お互いの関係を強固なものにしてきた。ただし、この関係は、純粹に血縁関係だけで成り立つのではなく、時には友人や疑似的な親族関係で結びつく者たちも加わることがあり、それらを含めて、人類学者のヒルドレッド・ギアツは、モロッコの事例から、「家族的

---

<sup>1</sup> ここでは、紙幅の関係で詳細には触れられないが、既に日本語でも人類学の親族研究についての流れが整理されている（河合 [2012]、瀬川 [1997]）。

つながり (*family ties*)」とそうした関係を表現した (Geertz [1979])。親密さによって人間関係を構築するのは、モロッコだけではなく、他の中東諸国でも見られる事例である。

人類学では、世帯を越えた血縁関係にある者たちを親族と呼び、それを社会の基本的な構成要素と捉えてきた。しかし、1980年代に、デイヴィッド・シュナイダーが『親族研究批判』において、自身のヤップ島における調査の見直しから、親族関係が血縁だけによらず、父系と母系からの土地を介した複合的な関係で流動的に成り立っていると指摘した (Schneider [1984: 91-92])。この批判の後、西洋に多く見られる血縁関係を親族関係の基盤とする親族論は、人類における普遍的な概念にはなり得ないとされ、下火になった。それは、調査地における人間関係を考察する際に、それぞれの社会の文脈に沿って理解していくべきであり、その中で必ずしも親族関係を中心に据える必要はなく、個人を中心に構成される関係を柔軟に見ていくことが求められるようになったからであると考えられる。さらに、問題関心が多種多様になり、親族が中心的な課題にならなくなったことも挙げられる。以降、研究は、構造としての全体よりも、個人を中心としたネットワークによって、人間関係を広く、血縁以外の要素も含めて分析していくようになった。

80年代以降、人類学における親族研究は、従来の理論を応用したより広い人間関係を包括するための方法を模索していく。それは、西洋を中心とした血縁関係による本質的關係に注目することで人間関係を理解するという以外に、人々が日々の生活で培う構造的な関係にも積極的に注目し、人間同士の結びつきを捉え直す試みであった。

例えば、ジャネット・カーステンは、「関係性 (*relatedness*)」という言葉を用いて、個人を基点とした人間関係の再検討において使用することで、親族研究が陥った生物学的または社会的な先天的親子関係の枠組みを乗り越えようと試みた (Carsten [2000: 3-5])。こうした人と人との「関係性」を問い直す様々な視点の中で、彼らが共有できるモノや経験などを、人間関係を構築するためのサブスタンス (*substance*) と定義して、それを介して関係を理解する概念は、柔軟な解釈により、広く人の結びつきを理解し、従来見過ごされがちだった関係に光を当てた。

サブスタンス論は、後天的に獲得される人間の社会的関係に注目し、従来の血縁的な系譜関係から把握する親族関係の範疇を越えた人々を包含する人間関係を説明する上で有効な概念である。ただし、サブスタンス論が血縁関係を中心とした従来の親族概念よりも広い関係を視野に入れられるようになったとしても、本質的關係が軽視される理由にはならず、両者を均等に考慮することが、これからの親族研究に求められるだろう。

生殖補助医療と親族論の関わりが興味深いのは、医療行為によって誕生した親子関係をどう理解していくかに、後者の培ってきた人間関係の把握が応用できるからであった。生殖補助医療の出現により、今まで子どもを持つことが難しかった夫婦の間にも子どもができるようになり、科学の発達によって可能になった新たな親子関係を考察する際に、

人間関係を家族用語で分類してきた親族論が再び見直されるようになった。親族論は、血縁によるつながりだけでなく、時には疑似家族的な関係も含め、お互いの親近感が関係の構築に寄与する点で注目されたのである。

## II エジプトにおける家族・親族関係について

次にエジプトにおける家族とは、どのような存在であるのかを見ていこう。エジプトで家族とされるのは、次の二つに大まかに分類される。一つが、居住を共にする一組の婚姻関係にある男女である父と母とその子供で構成される家族あるいは世帯を指す場合が多いウスラ (*usra*) である。エジプト憲法で社会の基盤として言及されている家族には、ウスラの語が用いられている<sup>2</sup>。それに対して、複数世代に亘る父子、または父を同じくする兄弟関係にある者と彼らの配偶者と子どもを含む父系親族からなるアーイラ (*'ā'ila*) がある。アーイラは、居住を前提にせず、父系のつながりをたどって何世代にもわたり、多くの成員を結びつけることを可能にする。エジプトにおける個人の名前は、本人の名前の後に、父の名前、祖父の名前と続く、3つの名前で構成されており、アーイラとしてのつながりが名前に反映されている。このアーイラによる父系のつながりにより、全ての男性は、後の男系子孫により、自らのアーイラの始祖になり得る資格を持つのである (大塚 [1983: 567])。

ウスラとアーイラの二つの概念は、明確に区分されているわけではなく、父系の系譜上のつながりとして存在し、状況によって使い分けられている。それにより、エジプトにおける家族概念は、その成員枠組みに柔軟性と実践的な目的を持つことができ、文脈に依存して、成員同士がお互いに援助の義務を持ち、構造的にも感情的にも近い成員の間で構築されるようになった (Rugh [1984: 56])。

しばしばこうした流動性は、実際に明確な系図がたどれる必要が必ずしもない者たちにまで拡大して解釈される。例えば、ナセルとサダト両大統領の時代に活躍した実在の政治家であるサイド・マレイを扱った研究では、彼の政治活動においてアーイラのネットワークが広く使われた実例を示している。その中で、彼は、1958年にエジプトとシリアがアラブ連合共和国を作った際に、自身の遠縁に当たるシリアの部族をエジプトに招待し、その政治的基盤の強化に役立てた (Springborg [1982: 54])。アーイラに関する先行研究は、こうした前提を踏まえ、その構成人数を幅広く算定し、時には地域を越えても成立するような集団概念としてアーイラを紹介してきた (Lichtenstadter [1952: 380-381])。具体的な系譜を越えた先祖を同じくするという共通の認識に基づくこうした関係は、一般的にアーイラよりもさらに広い親族概念としてカビーラ (*qabīla*) と呼ばれることも

---

<sup>2</sup> 2011年の革命前まで施行されていた1971年施行の憲法では第2部第1章第9条に (池田 (訳) [2001: 144])、2013年7月3日にエジプト軍によるムハンマド・ムルシー大統領の排除で停止された新憲法では第1部第1章第10条に記載されている。

ある。

アーイラは、日本のエジプト農村研究において、共同体論的アプローチで捉えられ、共同で土地を所有し、耕作する単位と考えられた（木村 [1973: 270], 中岡 [1970: 109]; [1973: 262-263]）<sup>3</sup>。さらに、耕作単位としてのアーイラは、父系に基づいて構成されるが、その中には擬制的な血縁関係を持った小作人も含まれるとされた（木村 [1973: 274]; [1975: 81]）。また、アーイラは、1つの居住区に集住し、父系で連なるその集合体が村を構成する単位になると考えられた（木村 [1973: 279-280]）。ただし、これらの研究は、研究条件の制約もあり、木村喜博による家族構造の研究（木村 [1975]）を除いて、先行の農村調査による二次資料に主に頼ったものであった。

しかしながら、これらの説は、共同体論が依拠する土地との結びつきからアーイラを考える点に限界がある。これらの農村社会研究に異議を唱え、加藤博は、分析のためにアーイラを血縁単位と土地所有単位に分けるように論じた [加藤 1981: 93]。そして、当時の小作契約を土地立法の規定から捉え直し、土地所有及び耕作は、小作人を含めた農民個人個人の契約による共同経営として成り立ち、それが結果としてアーイラによる土地所有に重なるとした [加藤 1983: 226]。共同体論的アプローチでは、アーイラを土地に結びつけて理解するために、土地を離れてアーイラを考察することができなくなってしまうのである。

近年では、質問表や統計、地図データを用いた一次資料による都市・農村研究が加藤を中心に行われ（Kato, Iwasaki and El-Shazly [2004], 加藤・岩崎 [2005], Kato, Iwasaki and Yabe [2006]）、その中で、世帯としての家族が整理された。そして、それらの世帯間で共通するアーイラ名を聞き取り、地図上に反映し、アーイラの空間的広がりを示す作業を、上エジプトと下エジプトの農村3ヶ所において行い、今日におけるアーイラのあり方を提示した研究も出てきた（Iwasaki [2006]）。また、19世紀の詳細な住民登録簿から、エジプトの家族を「世帯」の視点から分析する試みもなされている（加藤博 [2010]）。研究関心は、アーイラのような大家族の研究から、ウスラのような世帯を基盤とし、そこからアーイラとの関わりを考える研究へと、方向が移ってきたと考えられる。

つまり、エジプトの家族を考える時、個人、特に男性は、世帯としての家族であるウスラから、父系の系譜に連なる家族であるアーイラへと広がる家族の中に自身を位置づけている。子は、単に親との関係で存在するのではなく、その父が属する父系親族の一成員として認識される存在でもあるのである。そして、彼らとは、日常的な相互扶助や、危機に瀕した際の積極的な協力などにより、成員が相互に義務と責任を伴った結束力を持つようになるのである。エジプトにおける伝統的な家族観とは、こうした特徴を持っている（Rugh [1984: 32]）。

エジプトの家族関係では、血縁関係にあるという前提がその成員の条件になっている。

---

<sup>3</sup> 日本におけるエジプト農村とアーイラの研究については、拙稿で既にまとめたもの（岡戸 [2008: 48]）に加筆した。

その一方で、人類学ではサブスタンス論を用いた考察において、共食は、食を通して身体を構築し、それが血につながるという考えから、そうした関係を持つ人々の間で親密な人間関係が発生する、とされる (Carsten [2000: 22])。エジプトにも、「私たちは、共に(種無しパンである)エーシと塩を食べた (*kalnā sawa 'aīsh wi malh*)」(Badawi and Hinds [1986: 613]) とは、エジプトで食の基本となる二つのものを共に食べるような関係を持つ人々の親密さを表す諺として使われ、食事を共にすることが彼らの人間関係の構築において重要な役割を果たしているという意味を持っている (Early [1993: 135])。

しかしながら、共食は、親密な関係としての仲間意識を構築しても、家族とは明確に分けられている。ただし、エジプトでは、サブスタンスを血縁に近い関係を示すために用いる例として、母乳を介して成立する乳兄弟が存在する。同じ乳母に育てられた者同士が血縁関係にある兄弟姉妹と同等に扱われ、婚姻においてそうした乳兄弟になった姉妹を妻とできないことが、クルアーンやハディースでも触れられ<sup>4</sup>、イスラム法に多くを依拠するエジプトの婚姻法でも規定されている (埴 [1999: 17-18])。これは、母乳というサブスタンスが、血縁関係同様の人間関係を構築する事例であるが、親子関係ではなく、母乳を介した兄弟姉妹関係の構築に重点が置かれている。

生殖補助医療の分野では、様々な取り組みがなされているが、エジプトでは、この父系を重視した家族構造と、血縁以外の関係性を厳密に区別する原理によって、第三者からの生殖物質の提供が認められていない。また、代理母も認められておらず、夫の精子と妻の卵子を体外受精させ、できた胚を妻の子宮に戻す形で進められる。

### III 1952年革命以降のエジプトの家族関係と男性性に与える影響

エジプトにおいて、上記のように説明してきたアーイラとウスラという二つの伝統的な家族概念は、現代において大きな変化の兆しを見せている。その一つの要因として、エジプトで1960年代から増大する人口の抑制を目的として導入された家族計画が挙げられる。

家族計画は、人口増加が人々の生活水準を下げ、限りある資源の枯渇を導くと考えられたため、その抑制を目的として実施された。エジプトでは、人口減少と工業化により、国家の近代化がなされると考えられた。1952年革命以降、当初は家族計画導入に消極的だったが、高まる人口圧力の前に1965年に家族計画に関する最高評議会を設立し、上記の考え方に基づき、出生率の減少についての対策を講じた (Ali [2002: 30-31])。また、政府は、家族計画を介して、他の親族から再生産に関する圧力を受けない、独自の決定権を持った近代的な家族像の創出を目指した (Ali [2002: 123])。つまり、アーイラ的な拡大家族ではなく、ウスラ的な核家族を目標にしたのである。

<sup>4</sup> クルアーンでは、第4章23節に、婚姻が規制される対象が記述されている他、ハディースにも乳兄弟関係についての伝承がある (アル・ハッジヤージ [1988: 486])。

家族計画は、都市部から農村部へと順調に浸透していき、その結果、女性一人当たりが生涯に産む子の数である合計特殊出生率は、統計のある1976年に6.5人だったのが、2008年には3人まで下がり（CAPMAS [Various Issues]）、さらに、2012年末には2.4人まで落ちるといふ現地の新聞報道もあった。家族計画の浸透によって、子どもの人数が多い大家族が見直されるようになった。これは、この子どもが家長となる次世代にとって、彼の父を長とする大家族であるアーイラ内の世帯数の減少だけでなく、父方平行イトコ婚における結婚相手の選択肢の減少も意味する。特に、男子が生まれなければ、父系成員によるアーイラが成立しなくなってしまう。つまり、父系親族集団であるアーイラが形成されない可能性がある。この影響は、特に都市部で顕著である。

そして、家族計画とほぼ同時期に始まった国家の経済改革により、工業が発展するにつれ、農業が求める労働集約的で、農地と結びついた居住形態を持つ大家族としての家族のあり方は、工場への通勤という労働形態の変化に伴い、共住の必然性を失っていった（Khadr and El-Zeini [2003: 146]）。つまり、農業以外の生業が選択肢としてできることで、経済単位の家族も分割されていったのである。

もう一つは、1974年にサダト大統領による門戸開放政策により、海外出稼ぎの規制緩和が行われたことが挙げられる。海外出稼ぎ労働者数の増加により、海外に出て不在の夫の代わりに、妻が様々な社会的活動を行うようになり、女性が家庭内の決定権を持つ場面が出てきた（Hoodfar [1996: 51]）。ただし、女性が、夫の不在により、行政や子どもの学校とのやりとりなど様々な社会的活動を行うことで、自信を持つようになったとされ、女性の家庭内外での活動の幅を広げたが、出稼ぎは、男女の役割を変えるには至っていない（Hoodfar [1996: 68-70]）。むしろ、女性が外で働く機会を得たとしても、女性が家事労働に従事しなければならない性別役割は変わらず、女性の仕事が増えただけであるとも言われている（Ghannam [2002: 105]）。

出稼ぎの目的は、エジプトよりも賃金の高い産油国などで働き、生活水準を上げ、さらに稼いだ賃金を子への教育費用に充てて、彼らの社会的上昇を助けることにある。ところが、出稼ぎの恩恵は、彼の世帯としての核家族に向けられるため、アーイラ的な成員同士の相互扶助の概念から、援助を期待する父系親族には行き渡らないのである。その結果、出稼ぎの当事者は、兄弟や親からの期待に応えず、彼らとの反目を招く傾向にある。そして、家族は、経済的に扶養できる世帯としての核家族へと規模を縮小してしまうのである（Hoodfar [1996: 62-63]）。ただし、確かに経済面で家族は核家族化へと向かったが、筆者の調査では、地方から都市への出稼ぎでアーイラ成員が共に働く事例が見られる（岡戸 [2012]）。経済を離れた場面では、核家族を越えた情報の共有がなされており、広い親族関係からなる社会的ネットワークは現在も存在する。

海外出稼ぎの増加の背景には、家電製品などの様々なし好品があふれる消費社会の登場により、より現金を稼ぐ必要が出てきたことがある。特に、結婚の際に、多額の婚資

がかかるようになっただけでなく、結婚式などの関連の出費が増え、それら結婚資金を賄うために、より賃金の高い国で働く必要が出てきたのである。エジプトでは、成人男性は、独身でいるよりも、仕事を持ち、定期的な収入があり、そして結婚して子どもを持ち、家族を養うことを求められる (Ghannam [2013: 71])。その社会的責任を、消費社会での増大する要求の中で果たすために、海外出稼ぎは、より早く結婚資金を貯めるための選択肢として考えられるようになったのである。こうした結婚観は世代格差が存在し、一つ前の世代で、70年代に結婚した筆者の調査対象者は、結婚した後に家電製品など必要なものを買そろえれば良かったが、今日では彼らの息子や娘たちが結婚する際にはそれらがそろっていないと結婚できなくなり、お金がかかるようになったと話していた。

海外の出稼ぎ資金の国内への還元によっても、エジプト経済は根本的な回復へと向かわず、エジプトが過去数十年間進めてきた構造調整計画の下で、エジプトの経済は低迷を続けている。その中で、男性は、結婚するための資金が貯められず、結婚によって社会的責任を果たすような男性性を発揮できない状況にいる。それだけでなく、結婚後も、失業や、賃金が物価上昇に追い付かず、家族における経済的な担い手としての役割を十分に果たせなくなっている。さらに、低賃金から満足な食料が買えず、それにより性的活力が得られず、妻を性的に満足させられない、と悩む男性もいる。それは、男性性の危機として、男性の存在意義を揺るがし、彼らを苦境に陥れているのである。一方、女性の中には、家族の経済的な危機に、小さな商売を始めたり、近所の人との互助講からお金を集めてきたりといった行動に出て、家計を支える者もいる。だが、それが、さらに経済的な担い手である男性の立場を脅かすのである (Abdalla [2014: 58], Ali [2002: 132-133], Hoodfar [1999: 113])。

## おわりに—生殖補助医療と男性性の展望

エジプトでは、生殖補助医療をめぐる夫と妻の生殖細胞を使うことが、厳密に決められており、人々の宗教観、特に家族とは、血縁関係にあるものという考えは揺らぎがない。その一方で、親しさを示す概念として、疑似家族的な考えがあり、欧米のサブスタンス研究が対象とする現象と近い特徴が例えば乳兄弟に見られる。しかしながら、サブスタンス概念の解釈と、生殖補助医療による血縁を越えた新たな家族関係の創出を肯定する医療のあり方とは、エジプトでは線引きがされている。

つまり、親族論の生殖補助医療への応用では、親族論が規定した血縁による生物学的な関係とサブスタンスによる文化的な関係の両者が人間関係の構築において扱われたが、エジプトでは、前者のみが親族関係として適用され、後者は親しみを表す関係として留められたのである。家族を血縁関係にのみ限定するのは、エジプトにおける相続がイスラーム法を基本としており、故人との血縁関係によって明確に配分が決められてい

そのため、生殖補助医療によって第三者の生殖物質で生まれた子が登場すると、血縁関係の混乱を引き起こす可能性があり、これを避けるためであると考えられる。

エジプトでは、生殖補助医療は、あくまで不妊に対する解決策として導入されているのみである。ただし、エジプトでは、子は持つものであるという社会的な観念が根強くある半面、不妊解消の選択肢としての医療は費用と設備面で十分な需要を満たしていないという現状がある (Mansour, el-Faissal, and Kamal [2014: 18-19])。

2012年の革命後、女性に認められた離婚権を修正することを公的に掲げたイスラーム政党が躍進したのは、経済的な低迷で喪失した男性性を宗教に頼って回復させようとした動きとして見られている (Abdalla [2014: 56-57])。しかしながら、旧来の男性による権威主義的なあり方では、根本的な問題の解決には至っておらず、革命時に見られたように、男女が協力し合う姿が、望ましい状況にあると言われている。

エジプトにおける男性性は、固定された価値観ではなく、何が男らしいとされるかは家族や友人といった周囲による文脈に依存する性格を持っている (Ghannam [2013: 84])。特に、男性性の構築は、男性のみによって行われるのではなく、女性にも一定の役割が与えられており、家庭内での女性の支持が影響力を持つのである (Ghannam [2013: 90])。その意味では、生殖補助医療の利用が男性性を脅かすとは限らず、子の誕生に男性が積極的に関わる余地を持っており、精子の提供者としての役割を果たせるため、男性性の復活の可能性を秘めているのではないだろうか。子どもが生まれれば、男性は、子どもの親として、他者からも「誰々の父」と呼ばれるようになり、社会的な地位が確かなものになる。

生殖補助医療にかかる費用は高額であり、筆者がアレクサンドリア大学病院で聞いた価格は、1回の治療で、15,000～20,000LE (エジプトポンド: 1LE=16円 [2015年夏])であった<sup>5</sup>。現地では、相当高額であり、それが男性への圧力を高めてしまうが、エジプトには、イスラームによる喜捨など富裕層が問題を抱える人々を援助する機運があり、治療においてもそうした援助が期待できる (Inhorn [1994: 335])。

家族計画の推進は、適切な子どもの数や、その子どもに対する経済的な責任についての認識を持つように男性の意識の変革も目指した (Ali [2002: 41])。それにより、男性は、家族の再生産について、女性同様に関心を持つようになったと見られる。それは、生殖補助医療でも同様であり、家族の再生産に男性が意識的な関わりを持つようにさせる。近年の経済的な低迷から、男性性の回復には様々な方法が考えられるが、生殖補助医療の利用は、家族における男女関係の新たな構築の機会にもなるのではないだろうか。

また、エジプトにおける家族は、少子化により、その家族をめぐる状況は変化している。そうした現状を踏まえ、他のイスラーム諸国では第三者の生殖物質の利用に関して

---

<sup>5</sup> 現地調査は、2015年9月1日～9月18日かけて、エジプトアレクサンドリアで行った。

柔軟な受け入れ事例があるため、これからのエジプトにおける生殖補助医療の将来も注視していくべきである。

### <参考文献>

#### <日本語文献>

- 池田美佐子（訳） [2001] 「エジプト・アラブ共和国憲法」財団法人日本国際問題研究所編『中東基礎資料調査－主要中東諸国の憲法（上）』財団法人日本国際問題研究所、141-198.
- 大塚和夫 [1983] 「下エジプトの親族集団内婚と社会的カテゴリーをめぐる覚書」『国立民族学博物館研究報告』8(3) 563-586.
- [1994] 「身内がヨメにくると－アラブ社会の父方平行イトコ婚をめぐる」田中真砂子他編『縁組と女性－家と家のはざままで』（シリーズ比較家族3）31-53、早稲田大学出版部.
- 岡戸真幸 [2008] 「アレクサンドリアの上エジプト出身建築労働者による社会的ネットワーク形成－拠点としてのアホワ（伝統的喫茶店）を中心にして」『日本中東学会年報』24(1) 45-73.
- [2012] 『エジプト都市部における出稼ぎ労働者の社会的ネットワークと場をめぐる生活誌』上智大学アジア文化研究所 Monograph Series、上智大学アジア文化研究所.
- 加藤博 [1981] 「エジプト農村社会における村落有力者層－Leonard Binder の Second Stratum 論をめぐる－」『オリエント』24(2) 79-95.
- [1983] 「近代エジプト農村社会研究のためのノート」『東洋文化』(63) 211-236.
- [2010] 「エジプト農村における「家族」（アーイラ）：19世紀中葉オアシス村落に関する住民登録文書に基づいて」『東洋文化研究所紀要』(157) 197-234.
- 加藤博・岩崎えり奈 [2005] 「エジプトにおけるマイグレーションと地域類型－三種類のデータ（センサス統計・世帯調査データ・地理情報）を接合する試み－」『東洋文化研究所紀要』(147) 1-65.
- 河合利光 [2012] 「家族・親族研究の復活の背景」河合利光編著『家族と生命継承：文化人類学的研究の現在』15-44、時潮社.
- 木村喜博 [1973] 「農地改革前におけるエジプト農村社会の構造」川島武宜 住谷一彦編『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所 267-313.
- [1975] 「エジプトの農村－ナグウ・タラハーンの家系構造」『アジア経済』16(10) 76-87.
- 瀬川昌久 [1997] 「人類学における親族研究の軌跡」青木保他編『個からする社会展望』（岩波講座 文化人類学第4巻）、28-60、岩波書店.

- 中岡三益 [1970] 「エジプトにおける伝統的社会と西欧の衝撃」『後進国経済発展の史的  
研究—昭和四四年中間報告（その2）』アジア経済研究所所内資料 45(3) 89-137.
- [1973] 「エジプトにおける共同体—財産占取の形態と主体に関するノート」  
川島武宜 住谷一彦編 『共同体の比較史的研究』アジア経済研究所 257-266.
- アル・ハッジヤージ、イマーム・ムスリム・ビン [1988] 『日訳 サヒーフ・ムスリム 第  
二巻』磯崎定基、飯森嘉助、小笠原良治訳、日本ムスリム協会.
- 埴陽子 [1999] 『イスラム家族法（研究と資料）2：エジプト・レバノン・トルコ・付イ  
スラエル』信山社.
- マーフィ、ロバート・F、カスダン、レオナード [1982] 「平行イトコ婚の構造」大塚和  
夫訳、松園万亀雄編『社会人類学リーディングス』アカデミア出版会.

### <外国語文献>

- Abdalla, Mustafa [2014] “Masculinity on Shifting Grounds: Emasculation and the Rise of the  
Islamist Political Scene in Post-Mubarak Egypt” in Helen Rizzo ed., *Masculinities in  
Egypt and the Arab World: Historical, Literary, and Social Science Perspectives*, 53-73.  
Cairo: The American University in Cairo Press.
- Ali, Kamran Asdar [2002] *Planning the Family in Egypt: New Bodies, New Selves*, Austin, TX:  
University of Texas Press.
- Badawi, El-Said, Martin Hinds [1986] *A Dictionary of Egyptian Arabic*, Beirut: Librairie du Liban.
- Carsten, Janet [2000] “Introduction: Cultures of Relatedness,” in Janet Carsten ed., *Cultures of  
Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*, 1-36. Cambridge: Cambridge  
University Press.
- Central Agency for Public Mobilization and Statistics (CAPMAS) [Various Issues] *The Statistical  
Yearbook*, Cairo: Central Agency for Public Mobilization and Statistics.
- Early, Evelyn A. [1993] *Baladi Women of Cairo: Playing with an Egg and a Stone*, Colorado: Lynne  
Rienner Publishers.
- El Feki, Shereen [2013] *Sex and the Citadel: Intimate Life in a Changing Arab World*, Toronto:  
Anchor Canada.
- Geertz, Hildred [1979] “The Meanings of Family Ties” in Clifford Geertz, Hildred Geertz and  
Lawrence Rosen, *Meaning and Order in Moroccan Society: Three Essays in Cultural  
Analysis*, 315-391. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ghannam, Farha, [2002] *Remaking the Modern: Space, Relocation, and the Politics of Identity in  
Global Cairo*, Berkeley: University of California Press.
- [2013] *Live and Die Like a Man: Gender Dynamics in Urban Egypt*, Stanford, CA:  
Stanford University Press.

- Hoodfar, Homa [1996] "Egyptian Male Migration and Urban Families Left Behind: "Feminization of the Egyptian Family" or a Reaffirmation of Traditional Gender Roles?" in Diane Singerman, and Homa Hoodfar ed., *Development, Change, and Gender in Cairo: A View from the Household*, 51-79. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- [1999] *Between Marriage and the Market: Intimate Politics and Survival in Cairo*, Cairo: The American University in Cairo Press.
- Inhorn, Marcia C. [1994] *Quest for Conception: Gender, Infertility, and Egyptian Medical Traditions*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- [2005] "Sexuality, Masculinity, and Infertility in Egypt: Potent Troubles in Marital and Medical Encounters," in Lahouchine Ouzgane and Robert Morrell ed., *African Masculinities: Men in Africa from the Late Nineteenth Century to the Present*, 289-303. New York: Palgrave Macmillan.
- Iwasaki, Erina, [2006] "What is Aila?: A Comparative Study of Kinship Structure in Egyptian Village," *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)* 22(2): 125-148.
- Kato, Hiroshi, Erina Iwasaki and Ali El-Shazly, [2004] "Internal Migration Patterns to Greater Cairo: Linking Three Kinds of Data: Census, Household Survey, and GIS," *Mediterranean World* 17, 173-212.
- Kato, Hiroshi, Erina Iwasaki and Naoto Yabe, [2006] "Residential Patterns of Rural Migration in Greater Cairo Suburban Areas," *Annals of Japan Association for Middle East Studies (AJAMES)* 22(2): 105-123.
- Khadr, Zeinab and Laila O. El-Zeini [2003] "Families and Households: Headship and Co-Residence," in Nicholas S. Hopkins ed., *The New Arab Family*, 140-164. Cairo: The American University in Cairo Press.
- Lichtenstadter, Ilse, [1952] "An Arab-Egyptian Family," *The Middle East Journal* 6(4): 379-399.
- Mansour, Raga, Yahia el-Faissal, and Ominia Kamal, [2014] "The Egyptian IVF registry report: Assisted Reproductive Technology in Egypt 2005," *Middle East Fertility Society Journal* 19, 16-21.
- Rugh, Andrea B. [1984] *Family in Contemporary Egypt*, Syracuse, NY: Syracuse University Press.
- Schneider, David M. [1984] *A Critique of the Study of Kinship*, Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- Springborg, Robert [1982] *Family, Power, and Politics in Egypt: Sayed Bey Marei —His Clan, Clients, and Cohorts*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.